

# 最近の身辺から

津守 真

## I

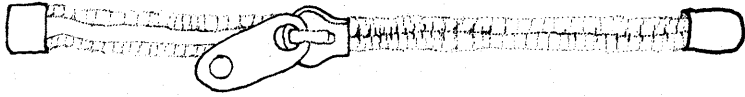
先日、米国で新しい福祉の最前線で仕事をしてこられたO氏が日本に講演にこられて、私はO氏と一緒に、私がかかわっている福祉施設を訪問した。途中車の中で話しのついでに、O氏はベトナム戦争のとき、兵役を拒否したために刑務所に二年間入ったことを知った。そのうち半分は福祉施設で働くことで代替になったとのことだった。私は、第二次世界大戦のときに良心的兵役拒否の制度があったことを、戦後に聞いて驚嘆したのであるが、ベトナム戦争のときも同じことがあったことを、O氏の話



ではじめて知った。そのことが施設内部の実情が世間に知られる一因となって米国における施設閉鎖の運動にまで発展したのである。

その施設で、身体運動のコントロールができない四十歳位の男性が、建物の壁に身体をぶつけながら戸外を歩いているところに出会った。こういうときには肩に優しく手を触れるだけで動作が変わることをO氏は話しながら、結局、ひとりひとりの人にこまかく配慮して生活の仕方を考えていくのが新しい福祉であることを強調された。重度の障害者に対してはこうするのがよいとか、自閉症の人にはこうするとか、障碍の特徴をひと括りにして処遇を決めるのではない。前述の男性は従来の考えでは重度の肢体不自由に属するだろうが、もしもこの人が二、三人の家族の中で生活することができれば、本人も周囲もずっと楽に過ごせるだろうとコメントされた。ひとりひとりの人にこまかく配慮することがサービスの中心である点は福祉も教育も共通である。

丁度そのとき、職員の会議をしていたのであるが、O氏は、自分たちは職員の会合は夜やった、昼間は職員が全力をあげてひとりひとりと親密な関係をつくることに専念すると鋭い批判をされた。実際、居住型の福祉施設では、職員の集りをどの時間帯にするかはいつも問題になる。私共も、福祉施設での研究会は夜九時からやるのはしばしばである。職員は超勤を要求もせず、それに参加している。福祉を、施設管理に中心をおくのではなく、ひとりひとりの人が自分らしい生活をする場へと変えてゆく



のには、ピープルファースト（人間最優先）の考えに立って、相手のためにはなんでもするという人々を必要としている。

## II

最近、私は養護学校には月に一、二度しか行かれない。私が行くといつも何人もの子どもが寄ってきてくれて、以前と変わりなく元気に迎えてくれる。なんと有難いことか。

昨日は、玄関のガラス戸の向こうにU子が見えた。私が玄関に入ると、U子はすぐに「しーずかーなー しずかーなー」と足と体でリズムをとりながら「里の秋」を歌い、私の手を引いた。「うえした」と言っ、二階の階段を私の手を引いて自分の足で上がった。この歌の背景には、ふたりに共通の次のような記憶がある。

私が保育の現場に毎日行かなくなつてから、もう三年になるのだが、U子は私が行くたびに喜んで迎えてくれる。先日は雨の日に、私の姿を見て、二階から外階段をおりて、水たまりの中を歩いて私の脇にきてくれた。水たまりの庭には出ようとしなかつた子どもなのだが。この子がかつては歩くのが不自由で、私に抱かれて階段を昇り降りすることを好んだ。とても重く感じられて、どうしたら床においてくれるかを苦心した日々もあつた。そんな頃、私はふと気が付いたことは、福音書の中の「神の



国はこのような者たちのものである」という一節だった。もしそうであるなら、子どもを抱いているときは、人は神の国に最も近くいられる時ではないか。そう考えると、重さが感じられなくなった。子どもとの間のこういう体験は両者の心に何か深い絆をつくるはたらきをしているに違いない。そして時を経るうちに、この子は抱かれなくても自分の足で階段を昇り降りするようになっていた。この歌の背景にはお互いの間のこのような体験がある。

この日、階段の上にはもうひとりの女の子Y子が待っていた。数年前にこの子がこの学校に来たとき、最初に出会ったのが私だった。母親の後ろではにかんでいたが、私が手を出すと、すっと私と一緒に二階の奥の部屋に来た。楽譜を手を持っていて、ピアノを弾くことを要求した。楽譜のあちこちを開いては私の顔を見て、笑った。そこにU子が来て私を取り合った。私が移動すると、この子は私とU子のあとをついて歩いた。ふたりはいつも張り合いながら、互いに引きあうものがあるらしく、一緒にいることが多い。この日も階段の上に到着した私の手をY子は強く引いて、奥の部屋で私にピアノをひかせた。この子の場合も、はじめて出会ったときの記憶が後までもつづいていて、再会ときはそこから出発してその続きを展開させるものであるらしい。

いまだに、喜んで迎えてくれるこの子どもたちに私は支えられている。



### III

毎月、私は養護学校の母親たちの教養講座を担当している。母親たちも待っていてくれて自分たちの話をしてくれる。この日ひとりの母親が言うには、家に帰ったとたんに子どもはまた外に行くことを要求して、体の丈夫でないこの母親は疲れきっていることを話した。母親たちは、そういうときには自分はこうしていると話して励ました。そのうちに皆が言ったことは、近ごろは行政の育児支援の制度があつて有難いのだが、日頃から子どものことを分かっている人でないと、本当に必要な援助にならないということであつた。

以前から、親たちの間では、家族に病人がいると聞けば、弁当を作り、送り迎えを助けるなど、自然の相互支援がなされてきた。こういうインフォーマルな援助は貴重である。そしていまや、インフォーマルだが、少しく組織化された小さな支援グループを自分たちの手で作れないものかと、親たちの話は活発につづいた。いまの時代に、どうしたらそれができるか、話は尽きなかった。